

## 第七話 谷沢永一 伝説の書齋

### ●はじめは一冊の本の再読から

大正時代のことをいろいろ調べていて、荒俣宏『異都発掘 新東京物語』（集英社文庫）に大正期の「ユートピア構想」について書いた章があったことを思い出して開いてみた。いや、じつは探したが見つからず、古本屋を回って買いなおしたのだ。まったく、もう。最初に読んだのはずいぶん前で、細かいことはあらかた忘れていた。ここだけの話だが、年をとって忘れっぽくなるのはいいことで、既に読んだ本でも、改めて新鮮な気持ちで対することができるのだ。まあ、半分、負け惜しみだが。

『異都発掘』についてのくわしい紹介は避けるが、博識博操の巨人が知恵と知識を駆使して東京を裏返し、そこに隠されたもう一つの近代都市の顔を暴き出してみせる。めちゃくちゃおもしろい本であります。私が目当てにしていたのは「ユートピア東京」という章で、著者はこんなふう書いている。

「しかし、なにせ東京は桑畑時代から富豪の大邸宅オンパレード時代を経て、農地開放のあとも原則的に非農地化をめざしつつげた。そこで出てくるのがいわゆるリベラリズム型都市生活やら文化生活などの新しいユートピアなのだが、その面で東京をみつめていくとなれば、これは何を措いても大正時代を採りあげなくてはならない」

岩崎邸の大庭園開放や、文化住宅、同潤会アパートなどをその実例として、大正時代に起こった躁的とも言える「理想郷」無想について、くわしく考証して読ませる。

### ●それでも本が増えていく

前回読んだとき、見過ごしたか、忘れたか。今回読んで目が釘付けになったのは次の箇所。

「たとえば大正初期には人生探訪が流行する。大正二年には棧雲峽雨なる記者が変装し東京の裏面を探訪する記事が「新公論」に連載され話題を呼んだ。旅役者から花売り娘にまで変装して、人生の暗黒を実体験レポートするのだ」

どうです、おもしろそうでしょう。これは読んでみたい。そこでネット検索をかけました。前回読んだときは、まだパソコンを使っていなかったもので、棧雲峽雲なる人物が気になっても、すぐにあきらめたのでしょう。まず、普通の人名事典などでは引っかかってこないことは間違いないからだ。

そこで今回はネット検索すると、棧雲峽雨とは本名・知久政太郎。東洋文庫に『棧雲峽雨日記』なんてのがあって、一瞬おおっと思ったが、これは明治の漢詩人・竹添井井の日記で、「棧雲峽雨」は四字熟語として使われていたのだった。ちなみに、山中の架け橋にか

かる雲、谷間に雨といった意味らしい。転じて、人生の心境として用いたものだろうか。明治、大正の新聞記者は、ペンネームを使って仕事をしていたらしい。

棧雲峽雨記者は、『記者探訪 裏面の東京』(大正三年／坂東書店)、『変装探訪世態の様々』(大正三年／一誠堂書店)などの著書を持つことがわかった。ほかに『催眠術の極意及原理』(大正六年。永楽堂書店)なんて、変な本も書いている。

紀田順一郎『東京の下層社会』(ちくま学芸文庫)によれば、大正期、「新聞記者が取材のため変装するのは日常茶飯事」で、実例として村川助三郎『東京闇黒記』とともに、知久の著作が挙げられている。『人生探訪変装記』(大正元年)という本もあったようだ。明治期にもすでに、岩波文庫に収録されているが、横山源之助『日本の下層社会』、松原岩五郎『再暗黒の東京』といった同様のルポルタージュがすでにあつた。明治・大正期に、この手の下層社会のルポが流行ったことがわかる。

しかし、知久の著作を、当時出た版で手にとるのは難しい。「東京の古本屋」などで検索するも、元版は見つからず、三一書房から出た『近代庶民生活誌』シリーズに、一部収録されていることがわかったぐらい。『変装探訪世態の様々』は、一九九八年に本の友社から復刻版が出ているようだが、これもいまや手に入れられるかどうか。

ところが、ないとすると現物を手に取りたくなる。古書会館で開かれる即売会の棚にごろりと転がっていたり、デパート展で裸本が安く出ていることがないかしらと、棧雲峽雨および知久政太郎の名が刻み込まれるのである。いつも言うのだが、古本買いに、金はあまり必要ではないが、好奇心だけは絶対不可欠の動力源だ。

こうして、『異都発掘』という一冊の本を手にとったことから、後を追うように次々と読みたい本が数珠つなぎで出てくる。きりがない。そして本が増えていくのだ。だから、今回のように入手困難なケースもあつていい。簡単に手に入るようになると、それはそれで困ったもので、やっぱり本が増えていく。ちょっと手に入りにくい本があるぐらいが、ちょうどいい。ネットによる手軽な注文を、だから私はなるべく禁じている。

しかし、どこを探しても見つからない、この棧雲峽雨『記者探訪 裏面の東京』をちゃんと所持している人がいた。恐るべし、古書通の文芸評論家・書誌学の鬼、故・谷沢永一である。

### ●小学生にして古書店に出入り

谷沢永一は今年(二〇一一年)三月八日に心不全で死去。享年八十一。大ベストセラー『人間通』を始め、多数の著書を世に送ったが、谷沢が何たるかを知るには、『完本 紙つぶて』(文春文庫、のち自作自注を付した最終版が文藝春秋から二〇〇五年に出た)にあたるのが一番だ。三十五年もの長きにわたり、ただ黙々と、世にはびこる無定見で空疎な著

作をばっさり斬り捨て、目立たぬが誠実で徳の高い研究を拾いあげ、称揚した書評コラムの集成。

相手が著名な研究者であろうが、国文学の大物であろうが、書かれたものに不備があれば、向こうずねを蹴飛ばすような批判をした。その舌鋒の鋭さに、みなたじたじとなったのだ。

一つ例を引く。岩波書店『古典文学大系』の『萬葉集』全四巻の共著者に、高木市之助の名はあるが、「単に解説のみ」を書いたにすぎないと断罪。「誰が見ても萬葉集の校訂注解を担当する学力もない者が、東大国文出身の先輩で、超大ボス久松潜一より六歳年長ゆえを以て、本文にタッチせぬ校注書に偽りの共著者として虚名を掲げ通した度胸はしたたかなもの」と言つてのけた。高木本人ならずとも身震いがする。

逆の例を一つ。「また岐阜県坂下高校文芸部の『友樹』は、第三十八号（四十一年十月）の『葉山嘉樹特集』以来、学生のみじめな作品研究と、指導した教諭浦西和彦の葉山年譜考証の画期的な綿密さで学界の評判になった」は、各地の高校文芸部が作った雑誌を賞賛した回の一節。目配りの広さと確かさが認められる好例だろう。そして、ここに名が挙がる浦西和彦は、のち谷沢が教授を務めていた関西大学文学部に引き抜かれていく。

谷沢は自ら書いているが、小学一年生のときから新刊書店に出入りし、やがて古書店へ足を運ぶようになり、小学三年のとき、島崎藤村の四詩集『若菜集』『一葉舟』『夏くさ』『落梅集』の初版揃いを買ったという恐るべき子どもであった。谷沢は現在の天王寺区、四天王寺あたりに生まれ育つ。中学校へ入ると、南大阪一帯の古書店の店主と口をきくようになる。すでにいっばしの蔵書家であった。中学三年にして、六畳の書齋を持ち、そこには足の踏み場もないほど本があふれかえていた。大阪空襲でこれらは灰燼と化すが、もうその翌日から、また古書店を回って蒐書に励んだと書いている。

すさまじいの一語だ。おそるべき十代の並外れた古書蒐集への蕩尽ぶりは、『書物耽溺』（講談社）に書かれている。こんなふうだ。

「中学校から帰宅する途中に久保書店があって、毎日顔を出しているうちに、中野重治『斎藤茂吉ノート』を見つけた。南海平野線で二駅寄り道して阿倍野斎場前で降りると、磯本丈一さんが出征した友人の店を預かっている。社会科学に格別詳しいので、座りこんではまだ知らぬ本について十分教わった。関西大学予科へ入ると地下鉄御堂筋線を難波で途中下車する。そこに明治文学の権威である伊藤一男さんのカズオ書店がある。しょっちゅう買物をしているうち、伊藤さんが、ちょっとこっちへ、と店の隅へ連れてゆき、これ、今のうちに買うときなはれ、これから先き役に立ちませ、と勧める。『文章世界』の揃い本誌合本である。残念なことに臨時増刊がない。しかし何時か見つかるだろう。カズオさんの言うことに間違いはない」

このあとも、天牛書店・尾上政太郎、黒木書店の黒木翁などとのつきあいが語られる。ここで、やっと私も顔を知る名前が出てきてほっとした。道頓堀角座前にあった天牛で、

でっぷりした尾上番頭の姿を、神戸元町の商店街でひとときわ黒っぽい本を並べ、客を威嚇するような鋭い目に見つめる黒木さんを、私はちらりと目撃したに過ぎず、二十代だったが、恐ろしくてとても声などかけられなかった。しかし、谷沢は、書くものは厳しく恐れられているが、人なつっこい双眸を持つ一面もある。名うての古書店主たちの懐に飛び込み、大学などより、むしろ古書店での会話から、多くのことを学んでいく。

### ●谷沢永一「伝説」の書齋

雑書蒐集歴をからめた自伝『雑書放蕩記』(新潮社)に、谷沢の書齋遍歴が語られている。これをもとに、希代の蒐集家がどんなふうに蔵書の保存に努めたかを見ていく。

まずは天王寺中学三年生。すでに古本屋通いは「病」のつく専心ぶりで、「南大阪のどの町どの辻に店構えがあるか、既に殆ど知り尽くしているの、道順を案じながら回遊魚のように尋ねまわる」といったふう。父親がもと大工の腕を奮い、二階の天井裏に小部屋を造ってくれた。わずか三畳間、かろうじて天井に頭がつかえない小部屋だったが、夕食後、中学三年の谷沢少年は「一国一城の主となる」。「書齋に座して壁面の蔵書を見渡しているとき、その静まりかえった僅かながらの燈火だけが、愛おしく満ち足りた我が世界である」と書く。

あまりに読書に熱中しすぎて、学校では劣等生、時代は次第に激しくなる戦火のなか、勤労働員で工場に通わされる生活だったのだ。この三畳の城は、昭和二十年三月十三日夜の大阪空襲であっけなく燃え落ちる。一夜明けて、すぐに「私はささやかながら蔵書の再建にとりかかった」と、古本屋通いを始めたのは前述のとおり。

戦災のあとに一家が住んだのは阿倍野区昭和町。二軒小間中という家屋に、父親の職人氣質がうずきだし、息子のために、二階を拡張して小部屋を作ってくれた。「裏堀の向うは汲み取り道であるから、堀の上に内と外へ張り出して四畳ほどの部屋ができた」。これが、あの開高健との邂逅と蜜月の日々を熟成させた伝説の書齋である。

周囲の壁には、東と南に一面の作り付けの本棚があり、西側には奥の浅い戸棚を置いた。部屋の中央に小さく低い机と椅子二つ。「身動きも儘ならぬ効率的な城が出来た」という。写真が残っているわけではなく、当方としては、ぼんやり想像するだけ。ところが、日本の古書店の店内を克明な鳥瞰図で再現する名人、イラストレーターの池谷伊佐夫さんが『書物の達人』(東京書籍)のなかで、「谷沢永一氏の“伝説の書齋”と題して、見開きで視角化してくださっている。これを見て、ようやく私も、なるほどこういう部屋だったかと納得がいったのである。

同著の記述を借りれば、母屋に隣接して、一部堀の外の狭い汲み取り道にまでせり出した空中に浮かんだ小部屋は違法建築だった。谷沢は大学へ入学するも、三年まで一度も校内に足を踏み入れることなく、この鳥小屋の書齋に籠った。そこに一年後、訪ねてきたの

が「やたら声の大きい怒り肩」、一つ年下の若者だった。これが開高健だ。池谷さんのイラストでは、ちゃんと若き日の二人が向かい合った姿も描きこまれている。開高はこの書齋にせっせと通い、大きなフロシキに谷沢から借りた蔵書を包んで持ち帰っていたという。

「私にとって昭和 20 年代後半の二坪ばかりで塀の上に浮いた書齋が、一生の基礎を作ってくれた」（日本の名随筆『書齋』作品社）。

### ●膨張する書齋、そして

開高健には「伝説の書齋」がどう映ったか。「谷沢永一のこと」（『ALL MY TOMORROUS 2』角川文庫）にはこう書く。

「当時の彼の書齋は文学、哲学、経済学から面白くてタメになる雑書本をも含めて天井から床まで鬱蒼としていて、私はそれを見るだけでたのしいよな、畏怖であるよな、のしかかってくるようなものをおぼえさせられた。それから毎夜のようにそこにかよって大風呂敷につめこみ、夜ふけの道を肩にかついで家にもどるという習慣になった」

大学生にとって充分すぎる書齋のようだが、「雑本（がらくた）の蒐集癖が病みつきになり、蔵書は増殖していく。母屋へまではびこるようになる。押し入れの僅かな隙間にも本は忍び寄り、全集や講座などの揃い物は二階の床の間へ、縦に積みあげた本の山を、後でどこに何があるかを迷わぬよう「発掘用の埋蔵見取り図」を書いた。

昭和二十五年に、谷沢は開高と「えんぴつ」という、これまた伝説的な同人誌を創刊させ、書き手としての助走を始めるが、ここでは触れない。書齋遍歴の先を急ぐ。以下、同じく『雑書放蕩記』から。

昭和二十八年十月、母の死去を機に、家を出て独立。美章園駅（大阪阿倍野区）に近い植島家の二階に下宿する。六畳と三畳の二間だったが「沢山の本は持ち込めないので蔵書の殆どは昭和町に置いた儘にしておかざるをえない」。谷沢は大学を卒業し、大学院生の身分だった。

昭和三十年に文学部助手の辞令を受け、翌年春、住吉区万代東の住居に移る。「一階と二階に廊下のような空間があるのを幸い、そこに書棚を並べた。併せて十坪ぐらいか」とある。昔の木造二階建ての標準的住居がうらやましいのは、部屋のまわりに、長い廊下があったこと。いまは、玄関を開けるといきなり部屋がある。じつは蔵書空間として、廊下ははなはだ使い勝手がよかった。

昭和三十四年一月、結婚。四月に専任講師となり、三十五年秋、宝塚市売布の建て売り住宅を買う。それまで大阪の南にいた谷沢が、関西大学（大阪市吹田区）への通勤の便を考え、阪神間へ移り住む。ここに、阪神大震災で多大な被害を受けるカウントダウンが始まっていた。

売布の住居に「隣接して二十坪を増築、うち十三坪を書庫、七坪を書齋とする。ようやく蔵書を一箇所に集めることができた」。それまでは、伝説の書齋にまだ本は残してあった

から、蔵書は分散していた。気持ちを半分残したまま生きるような、読書生活だったのが、新しい書庫ができたことにより解消したわけである。この喜びは、わかるなあ。

三十七年、助教授に昇進、四十一年一月、これが終の住処となる川西市花屋敷に新築して移住する。「一階と二階に十坪ずつの書庫を設える。四十三年教授。その間、蔵書は増える一方」で、懇意にしている古書店に何度か蔵書を処分した。

それでも買う量に書庫のキャパは追っ付かず、五十六年八月、第一回の増築。これで四十坪となる。その後、さらに増築し五十坪。

標準的な町の古本屋、それもやや広めの店舗が、だいたい十坪ぐらい。それを五軒分あわせた書庫を持っていることになる。本好きにとって、「すごろく」で言えば「あがり」に近い夢の城だったはず。